

演習 保育内容

言葉

— 基礎的事項の理解と指導法 —

戸田雅美 編著

岡田たつみ

金澤妙子

亀崎美沙子

菅野良美

小久保圭一郎

田中卓也

内藤知美

永倉みゆき

平山祐一郎 共著



建帛社
KENPAKUSHA

はじめに

保育を学ぶみなさんであれば、現在の日本の保育制度がとても複雑であることを知っていることだろう。幼稚園（文部科学省）、保育所（厚生労働省）、幼保連携型認定こども園（内閣府）など、様々な保育の場がある。しかし、今回の改訂（定）で、どの保育の場においても、幼児教育を行うことが決まったことは、画期的なことである。そして、小学校就学前までに育みたい資質・能力と「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」が、共通して定められた。それも、これまでと同じく5領域の保育内容を通してとされている。

そのために、どの保育の場においても、保育内容である「領域」ごとのねらいと内容の共通化が図られた。具体的には、3～5歳児の保育内容の共通化、さらに、3歳未満児の子どもを保育する場である保育所と幼保連携型認定こども園においては、1歳～3歳未満児の保育内容と乳児保育（0歳児）の保育内容についても、共通化が図られることになった。また、保育者養成課程における、保育内容の基礎的事項と指導法についても、実践に基づいてより深く学ぶことが求められるようになった。おそらく、日本で育つ就学前の子どもたちは、どの保育の場であろうと、同じように豊かな育ちを保障したいという願いが込められているからであろう。

本書の特徴は、新たな養成課程が求める、保育内容「言葉」の領域の指導法について、基礎的事項についても、実際の指導法についても、学ぶことができるようにしたことである。そのため、養成校で学ぶべき要素を、どの章で学ぶことができるかを示す表を付けることにした（目次の前に掲載）。この表を確認することによって、保育者養成の中で求められている保育内容の学びについてや身に付けるべきことを理解し、学生自らさらに学びを深めることができるようなガイドとすることにした。大学等の養成校での学び方も今回大きく変わり、アクティブラーニングや実際に授業を受ける時間の2倍の事前・事後学修をすることが求められるようになった

た。アクティブラーニングのためには、その準備やまとめるための時間が必要だからである。この表は、アクティブラーニングと学生主体の学びのためのガイドとして使っていただけたら嬉しく思う。

さて、保育内容「言葉」について、学ぶということは、多くの「問い」から出発するべきであろう。例えば、そもそも私たち人間にとって「言葉」とは何か、「言葉」はどのように育って（発達して）いくのか、保育内容「言葉」のねらいや内容はどのように定められていて、どのように指導したらよいのか、それ以前に、子どもの言葉の実際はどうなっているのか、計画や評価はどのようにしたらよいのか、などである。本書では、保育内容「言葉」をめぐる「問い」を探求する旅のように組み立てた。各章に掲載した、たくさんの事例を読むことで、子どもの姿をイメージしたり、保育者の援助の意図を考えながら、学んでいただきたい。また、事例からは、子どもたちが遊びや生活の中で必要になって、自分なりに言葉の世界を広げている姿が見えてくるだろう。まさに、子どもって、かわいいなあ、面白いなあ、子どもなりに考えてるなあなど、子どもへの理解と共感から保育内容を学んでいけるテキストをめざした。

このテキストを基本にして学び、実習やボランティアを経験し、また、テキストに戻って学び、あなたらしく子どもの「言葉」の豊かな育ちを支える保育を創造できるようになってほしいと願っている。

2019年3月

編者 戸田雅美

A. モデルカリキュラム「幼児と言葉」における到達目標と本書の対応項目

(1) 言葉のもつ意義と機能	
〈一般目標〉	
人間にとっての言葉の意義や機能を理解する。	
〈到達目標〉	本書の対応章
1) 人間にとっての話し言葉や書き言葉などの言葉の意義と機能について、説明できる。	第1章
2) 乳幼児の言葉の発達過程について、言葉の機能への気付きも含めて説明できる。	第2章
(2) 言葉に対する感覚を豊かにする実践	
〈一般目標〉	
言葉に対する感覚を豊かにする実践について理解する。	
〈到達目標〉	本書の対応章
1) 言葉の楽しさや美しさについて、具体的な例を挙げて説明できる。	第1・7章
2) 言葉遊びなどの言葉の感覚を豊かにする実践について、基礎的な知識を身に付ける。	第1・10章
3) 言葉の楽しさや美しさに気付き、言葉を豊かにする実践を、幼児の発達の姿と合わせて説明できる。	第1・3・7章
(3) 言葉を育て、想像する楽しさを広げる児童文化財	
〈一般目標〉	
幼児にとっての児童文化財の意義を理解する。	
〈到達目標〉	本書の対応章
1) 児童文化財（絵本・物語・紙芝居等）について、基礎的な知識を身に付ける。	第10章
2) 幼児の発達における児童文化財の意義について理解する。	第10章

B. モデルカリキュラム「保育内容「言葉」の指導法」における到達目標と本書の対応項目

(1) 領域「言葉」のねらい及び内容	
〈一般目標〉	
幼稚園教育要領に示された幼稚園教育の基本を踏まえ、領域「言葉」のねらい及び内容を理解する。	
〈到達目標〉	本書の対応章
1) 幼稚園教育要領における幼稚園教育の基本、領域「言葉」のねらい及び内容並びに全体構造を理解している。	第3章
2) 領域「言葉」のねらい及び内容を踏まえ、幼児が経験し身に付けていく内容と指導上の留意点を理解している。	第3～9章
3) 幼稚園教育における評価の考え方を理解している。	第3～9章
4) 領域「言葉」に関わる幼児が経験し身に付けていく内容の関連性及び小学校の教科書等とのつながりを理解している。	第3・6・8章
(2) 領域「言葉」の指導法及び保育の構想	
〈一般目標〉	
幼児の発達や学びの過程を理解し、領域「言葉」に関わる具体的な指導場面を想定した保育を構想する方法を身に付ける。	
〈到達目標〉	本書の対応章
1) 幼児の心情、認識、思考及び働き等を視野に入れた保育構想の重要性を理解している。	第3・6～8・11章
2) 領域「言葉」の特性及び幼児の体験との関連を考慮した情報機器及び教材の活用法を理解し、保育構想に活用することができる。	第10・11章
3) 指導案の構造を理解し、具体的な保育を想定した指導案を作成することができる。	第11章
4) 模擬保育とその振り返りを通して、保育を改善する視点を身に付けている。	第3～9・11章
5) 領域「言葉」の特性に応じた現代的課題や保育実践の動向を知り、保育構想の向上に取り組むことができる	第3～9・11章

目次

I. 保育内容の「言葉」への理解

第1章 「言葉」ってなんだろう	7
1. 人間にとっての言葉の意義.....	1
(1) 言葉での表現がコミュニケーションを支える	1
(2) 言葉は世界の捉え方を変えることによって 思考を支える	3
(3) 言葉で広がるイメージの世界	3
2. 言葉の美しさや楽しさを味わう.....	4
3. 言葉の不思議に気づかせてくれる言葉遊び.....	5
4. 子どもの言葉から読み取る.....	7
(1) 大切なことを表す言葉の機能	7
(2) 文字の機能に気づく	9
第2章 子どもの言葉の育ちとその道すじ	12
1. 言葉の育ちの道すじを知る意味.....	12
2. 言葉の誕生以前.....	13
3. 一語文から二語文へ.....	14
4. 語彙の発達.....	19
5. 会話の発達.....	20
6. 言葉と思考.....	22
7. 話し言葉から書き言葉へ.....	23
第3章 領域「言葉」のねらいと内容及び評価	26
1. 保育における「要領」「指針」の全体構造と領域「言葉」.....	26
(1) 「要領」「指針」の目標と領域の関係を理解しよう	26
(2) 小学校教育との接続	29
(3) 「保育の基本」として共通すること	31
(4) 計画と評価	33
2. 領域「言葉」のねらいと内容及び指導上の配慮について.....	34
(1) 3歳以上の子どもの言葉の育ちを支える保育	35

- (2) 1歳以上3歳未満の子どもの言葉を支える保育 38
- (3) 0歳の子どもの言葉の育ちを支える保育 39

II. 言葉の育ちを支える保育の実際

第4章 0歳児からの言葉の育ちを支える 41

- 1. 言葉の前の言葉 41
- 2. 相互応答的なかわり 42
- 3. 繰り返しとずらし 44
- 4. 指さしと三項関係 45
- 5. 一語発話の時期 46
- 6. 発話を促す大人のかかわり 48

第5章 1歳から3歳未満児の言葉の育ちを支える 50

- 1. 1歳から3歳未満児の言葉の実際 50
 - (1) 言葉の誕生 51
 - (2) 一語の多様性 52
 - (3) 生活経験を生かして 53
 - (4) 質問期(命名期) 54
 - (5) 模倣の繰り返しと獲得と 54
- 2. 言葉が育まれるために 56
 - (1) 伝えたい相手のいる暮らし 56
 - (2) 伝えたいことのある暮らし 56
 - (3) 自分の気持ちを表現しようとする意欲 57
 - (4) くみ取る・受け止める人の役割 58
 - (5) 言葉や文字を使用した保育材 59
- 3. 人とのかわりと言葉 61
- 4. 社会的なルールとしての言葉 62
 - (1) 「かして」 62
 - (2) 「入れて」 63
- 5. 保育文化財の中にある言葉 65
 - (1) 絵本 65
 - (2) 手遊び 66
 - (3) リズム・身体表現 67

6. 身近な人とのかわりに支えられて	67
(1) 保育者を介して	68
(2) 異年齢間で	69
(3) 子ども同士の遊びの中で	69
第6章 言葉で伝え合えることの喜びを支える	71
1. 遊びや生活の中で生まれる「言葉」で表現する喜び	71
(1) 「言葉」への興味	71
(2) 大人が“書いてあげること”の意味	74
2. 言葉で思いや考えを伝え合うこと	75
(1) “つながりたい”思いの出し方	75
(2) ひとことが関係を変える	78
(3) 言葉が支える楽しい“ひととき”	82
3. 遊びの中の協同的体験と伝え合い	83
(1) 困った時が、知恵を出し合うとき — 話し合う —	83
(2) 一緒にやると、面白い — 協同的体験 —	85
(3) 子ども同士がつながる土台をつくる保育者の かわり	88
第7章 遊びから生まれる表現を支える	91
1. 心の動きと言葉	91
2. 自分の気持ちを表現する	92
3. 言葉遊びや劇的表現を支える	94
4. 気持ちが伴う豊かな言葉の育ち	99
第8章 言葉で考える意欲の育ちを支える	101
1. 自分の言葉を育てる	101
2. 身体や体験を通じて自分の言葉を獲得する	103
3. 自分なりのペースで考える	105
4. 一人で考える	107
5. 友達と考える・みんなで考える	109
6. 文字で考える	110

第9章 言葉でのかかわりに配慮を要する子ども 112

1. ある実習生の姿から 112
2. 外国籍の子ども 113
 - (1) ある新人保育者の悩み 113
 - (2) 初めて外国籍の子どもを受け入れる 114
3. 障害のある子ども 115
 - (1) 「かみつき」とのたたかい 116
 - (2) タクヤとの苦しい日々, そして 116
 - (3) 笑顔でかみつき, そして卒業 117
4. 専門機関・医療機関との連携から 118

第10章 言葉を育む文化財 120

1. 絵本, 物語, 言葉遊び, アプリなど 120
 - (1) 赤ちゃんに絵本を — ブックスタート運動のはじまりと広がり — 120
 - (2) 人との触れ合いの中で「お話」に出会いその楽しみを感じる 121
 - (3) 子どもの成長に欠かせない「言葉遊び」 122
 - (4) アプリ・動画ソフト 125
2. 文化財との出会いから遊び, そして言葉の育ちへ 126

第11章 指導案作成から保育へ 129

1. 保育へとつながる指導案の作成 129
 - (1) 指導案作成と保育 — 乳児クラス 130
 - (2) 指導案作成と保育 — 幼児クラス 132
2. 指導案からつながる保育実践 134
 - (1) 遊びの中で育む「言葉による伝え合い」 134
3. 振り返りと評価 146

第12章 言葉をめぐる相談と保護者との連携 149

1. 保育における相談・助言 149
2. 保育者を不安にさせる言葉の問題 150
 - (1) 吃音(どもり) 150
 - (2) 嘘をつく 151
3. 言葉の遅れ 152

(1) 話さないこと, 遅れていること	152
(2) 発達の遅れ	153
4. 相談への対応	154
(1) 保護者の思いを受け止めながら, 問題を 明確化する	155
(2) 子どもの理解の視点や対応のモデルを示す	155
(3) 発達の見通しを示す	156

付 録

学校教育法 (抄)	157
幼稚園教育要領 (抄)	157
保育所保育指針 (抄)	160
就学前の子どもに関する教育, 保育等の総合的な提供の推進 に関する法律 (抄)	164

第1章 「言葉」ってなんだろう

予習課題

1. この章を学ぶ前に、二人組になり、次のワークショップをしてみよう。
 - 1) 言葉（手話も含め）を使わずに、ジェスチャーで何かを伝えてみよう。
聞き手も言葉で聞き返さないこと。
例：先週は幼稚園のお泊り保育で、カレーライスを作って食べたり、キャンプファイヤーをしたりして楽しかった。
 - 2) 一人が話をし、もう一人が聞くのだが、忙しくて返事ができない想定ワークを1分間ずつ交代してやってみよう。
 - 3) 互いに自分の欠点と思うことをできるだけ具体的に紙に書き、交換した後、その欠点がむしろ長所にもなりうるという返事を書いて、相手に返してみよう。
2. 各自あらかじめ調べてきて、グループで考え合ってみよう。
知っているなぞなぞや早口言葉などの言葉遊びを発表し合い、言葉の観点から考えてみよう。

1. 人間にとっての言葉の意義

(1) 言葉での表現がコミュニケーションを支える

予習課題1-1)をやってみて、どう感じただろうか。普段言葉を使えば簡単に伝わるのが、なかなか伝わらないもどかしさに驚いたかもしれない。特に「先週」というような過去や「今から20年後の未来」といった時間などの目に見えない事柄は、「カレーライス」のように、目に見え

るモノに比べると伝えることが難しい。さらに「この作品の芸術史における位置」「目に見えない真実」など、抽象度の高い内容を伝えたいと思ったとしよう。おそらく、人間にとって言葉がいかに便利で、また、言葉によってしか伝えられないことが多いことに気づくだろう。

人間が他者と共にその生活を豊かに営もうとすれば、そこには、相手に伝えたいことや相手と共有し合いたいことが生まれてくる。それは、今の気持ちであったり、ちょっとした情報や日ごろ考えていることだったり、問題を解決できるアイデアだったりする。その伝え合いとは、「コミュニケーション」と呼ばれることもある。伝え合い（コミュニケーション）において、大きな力になるのが、言葉だということができる。そして、人間関係が確かなものであるほど伝え合いがうまく成立するものである。また、反対に、伝え合いがうまく成立するほど、人間関係が確かなものにもなっていく。人間関係と伝え合いは、相互に支え合う関係にあるといえる。

言葉が、人と人をつなぐものであるということ的前提にすると、発せられた言葉に対しては何らかの応答があることが期待される。例えば、握手をすることが人と人をつなぐものだとしたら、一方が手を差し出し、相手も手を差し出さなければ、握手も成立しなければ、人間関係もうまくなくなってしまふこととよく似ている。つまり、言葉を発するということは、握手をしようと手を差し出す行為とよく似ている。

予習課題1-2)は、言葉を発したのに、応答がなかった場合の気持ちを少しだけ味わってみようとするものである。実際、保育の現場は多忙なことが多い。子どもの言葉はゆっくり聞かないと理解が難しい場合もあり、「安易に返事をしてしまうよりは後で聞こう」と思ってしまうこともあるかもしれない。しかし、「少しだけ待っててね」と言葉で伝える、あるいは、目線や表情だけでもこの言葉の意味を込めて返すことが大切である。言葉を発するということは、応答を期待しているという、ごく当たり前のことを心にとめておく必要がある。そうでない場合、言葉が、人と人を分かつものにもなりかねないということである。

(2) 言葉は世界の捉え方を変えることによって思考を支える

人は言葉によって世界の見え方、捉え方を変えることができるということも忘れてはならない。予習課題1-3)は、欠点としか捉えられなかったことでも、長所となることを言葉で見出すことができると確認するものである。例えば、友達が書いた「心配性で無駄に時間を使ってしまう」という欠点に対して、相手が「心配性なおかげで物事を進めるときには何度も確認したりするので失敗が少なくなる。あらゆる心配事について検討してしまうので準備不足がなく、想定しがたい出来事にも落ち着いて対応できる」と書いて返してくれたとしよう。これを読むと「心配性」の捉え方が変わって見えてくる。「心配性」であることは良い面もあり、悪い面ばかりではないかもしれないと、捉え方そのものも変わっていることに気づく。それは、言葉によって変えることができたものである。ここでは、言葉でこのように捉え方を変えてみるのが求められる。改めて、言葉を駆使して考えていく過程を振り返ると、言葉には、見方や捉え方を変えるという機能があることに気づく。これもまた、大切な言葉のもつ機能である。

世界の見え方を変えるという言葉の機能の延長線上に、あるいは、同時並行的に、言葉で思考するということがある。世界が平和であるために必要なことは何かという問いについて考えることは、現実の世界が平和だと言いきれないとしても、どうしたら平和になるのか、理想的な平和な世界とはどのような状態をさすといえるのかなど、言葉によって見え方を変えることで思考が始まる。また、その思考の過程も言葉によって形づくられていく。

(3) 言葉で広がるイメージの世界

さらに、この言葉の機能の延長線上には、思考するというだけではなく、詩や物語という世界も広がっている。わくわくするような物語の世界も、言葉によって目の前にある現実とは違う世界が構築されることで、イメージを膨らませ、まさにその物語の世界を生きているかのように感じる

れる、あるいは、そのような見え方を味わうことができる。

『ぐりとぐら』¹⁾の話は有名なので小さいころ読んでもらったことがあるかもしれない。ぐりとぐらという野ねずみがいる。その野ねずみたちが、大きな卵をどうやって運ぼうかと悩んだり、色々と試行錯誤しながらも、カステラができあがる。そこから、おいしい匂いがしてきたとイメージできることが必要である。つまり、物語の世界を想像するためには、言葉に導かれつつその世界を構築してみる、物語の世界が目の前に見えるかのように捉える、という言葉の機能がそこには働いている。

もちろん、言葉だけで表現するのは難しいこともある。それを補っているのは、絵本に描かれた絵のもつ力でもある。また、絵本には、絵だけで物語の世界をつくることのできるようなものもある。まさに、言葉のない絵本である。しかし、多くの絵本では、絵と言葉が共にあることによって、より豊かな世界が表現できている。例えば、『ぐりとぐら』の場合でいうならば、「ほくらのいちばんすきなのはおりょうりすること たべること」という内容を、絵だけでは表すことは難しいであろう。これは、予習課題1-1)で、言葉で言えれば簡単なのに、言葉を使わないでどう表わしたらいいのか困ったという実感に照らして考えてみよう。言葉が他の表現方法に比べて有利な面ばかりとはいえないが、言葉が他の表現より有利に働く面もまた多いということができよう。

2. 言葉の美しさや楽しさを味わう

『ぐりとぐら』の絵本の言葉や絵から想像し、その物語の世界を創造できるのは、言葉が機能しているということが理解できただろう。

ところで、この野ねずみたちの名前は、なぜ「ぐり」と「ぐら」なのだろう。それは、この絵本の作者が、言葉の美しさや楽しさを絵本の魅力にしたいと意図したからではないだろうか。もし、この野ねずみたちの名前が、「たろう」と「てつや」や「あい」と「うえ」だったとしたら、この絵本がこのようにシリーズ化され、ロングセラーになっていなかったに違